

被災地とつながり 続けるために

7月12日、全国の震災支援ボランティア担当者が集まる「第1回 震災支援ボランティア活動担当者交流会」がコラッセ福島(福島市)にて開催され、それぞれの思い、アイデア、課題を共有しました。



それぞれの生協の担当者が、思いを伝え合う場となった。

集まったのは、全国の生協の震災支援ボランティア担当者など45人。

第1部では、現在のボランティアの現状報告や、被災3生協から、震災復興の進捗状況についての具体的な報告がありました。

第2部では、3グループに分かれ、それぞれの生協の活動内容や課題を出し合いました。あるグループでは、「被

災された方との交流の場のスタッフは、同じメンバーが継続的に参加したほうがよいと聞くと、費用や時間の面で難しい。どうしたらよいか？」という問い掛けに、被災地生協から、「同じ人でなくてもよい。遠くからわざわざ来てくださることがうれしい」という意見があったり、「皆がよく知るコープ商品が交流の場にあると、共通の話題になっ

てよいのではないか」という意見が出たりしました。また、「避難されてきた方が本音で話せる場所がない」といった課題も共有されました。「皆、同じような悩みを抱えていることが分かり、今後具体的にどのような取り組みをしていくか考えるヒントになりました」といった感想が参加者から出されるなど、実り多い交流会となりました。

復興進まぬ南相馬市 求められるボランティア

4月16日に警戒区域が解除された福島県南相馬市小高区で、日本生協連ボランティア隊の活動が行なわれました。被害を受けたまま放置された家屋。ボランティアの力がまだまだ必要です。



津波の被害を受けた家の中を片付けるボランティア。

今年4月に警戒区域が解除された福島県南相馬市小高区。5月11日の毎日新聞朝刊に「力仕事助けて がいき撤去 ボランティア不足」のタイトルで記事が掲載されたことを受け、日本生協連ボランティア隊「笑顔とどけ隊」は6月16、17日に、南相馬市にボランティアに赴きました。

現地は、あちらこちらに車が転がり、

家は今にも朽ち果て崩れそうな姿になっており、3月11日の地震・津波の被害を受けたままの姿がそこにありました。水も電気も通っておらず、住民の宿泊も許されていません。

ボランティア隊は、現地ボランティアセンターからの依頼を受け、家屋の床下の泥かきや、めちゃくちゃになった家財を片付ける作業などを行ないました。

現地の方は、「原発事故で避難した後、何を訴えても誰も聞いてくれない。復興が進んでいるように報道されていますが、私たちは国が何とかしてくれるのを待つしかありませんでした。復興が進まないこの町の状況をもっと多くの人に知ってほしい」と話していました。